

292 東金における中央大学辞達会

〔「法学新報」第21卷9（246）号 明治44年10月1日〕

○東金に於ける中央大学辞達学会 去る九月十七日中央大学辞達学会第二回學術講演会を千葉県東金町に開く非常の盛会にて聴衆千余会場立錐の地なく開会後第一に登壇せるは学生常田力氏にして「刻下の最大急務」と題し目下最も憂ふべきは中等国民の減少にありとなし之か救済策を經濟政策学上より論し次に学生植木義雄氏は「自由教育の積弊」と題して國家教育主義の立脚地を論し教育問題の放任せらるるを慨す次は學員横田稔氏にして「官私両学論」と題し其沿革より説き起して両者の長短を挙げ同渡辺英三氏は「國民覚醒之秋」と題し關稅、人口、生産等の諸問題を論し、了て學員茅原藤太郎氏は外遊七年間の見聞により各国の制度文物風俗を説き地方民の教育に資益する所（マ）對なからさりき學員卜部喜太郎氏は「余か人生觀」と題し人か王侯貴人にも屈せず自尊し得らるる途は日日其本分を守つて善をなすにありと孔孟の教を引て演述し最後に法学博士奥田義人氏は「法律と國民道德」と題して維新後各法典の沿革小史を述へ漸次疏より密に入り「我法典は個人主義を重んじ家族制度を破るの虞あり」と十数箇の好適例を引て之を説明し家族制度の維持は最早國民の道德に待つの外なし然るに道德は法律か強要する一夫一婦制の如きすら行ふ能はざる程度にあり國民たる

ものの反省を促すと論するや拍手急霰の如く鳴り之を以て当時
の講演会は全く終りを告げたり（委員報）